バレンタイン

恭架

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バレンタイン

【Ｎコード】
Ｎ８１３７Ｒ

【作者名】
恭架

【あらすじ】
恋愛。バスで出会ったお兄さんへの片思い。

出会い

「次は・・・桜田・・・お降りの方はお知らせください。」
車内アナウンスが流れる。私は心のなかで思う。「今日もあの人が乗ってくるかな・・・。」

それは文化祭をもうすぐに控えたある日。
私は文化祭の準備の為に、いつもより少し早いバスに乗った1月のある日。サラリーマンや学生でバスの中は大混雑。
私は、座席に座れず、立ったまま乗っていると高校生のお兄さんが乗ってきて、私のすぐそばに立っていた。すると、そのお兄さんの目の前の座席が空き、お兄さんは、すっと座席に座り、むずかしそうな教科書を取り出し勉強を始めた。

私は、その難しそうな教科書が気になり、どこの高校に行ってるのだろう?と思い、
お兄さんの制服で「春ヶ崎高校なんだ。頭いいんだなぁ。」と心の中でつぶやいた。
そして、真剣に難しそうな教科書を読んでいる姿が、とても爽やかで、印象に残る顔立ちをしており、ついお兄さんの細くて、長い指先まで見てしまっていた。

バス停に止まるたび、人が多くて流されそうになるけど、今日だけはここに、お兄さんの前に立っていたい、そんな気持ちがわたしの中にあった。

お兄さん

「次は、春ヶ崎、お降りの方はお知らせ下さい。」
車内アナウンスがまた流れる。お兄さんは、急いで難しそうな教科書はかばんにいれ、
あわてて立ち上がった。
そのとき、
お兄さんは前に立っていた私を見て「座りますか？」という視線を投げかけた。
私はビックリし、あわてて頭を下げた。
お兄さんはそのまま降りていった。
私はそのお兄さんのことが気になり、窓の外を見たけど、お兄さんを見ることはできなかった。
少しの間の出来事なのにとても印象に残った。
これが、春ヶ崎高校のお兄さんとの出会いだった。

情報

私は次のバス停（桜野）でバスを乗り換え、いつものように、桜華中学校へと向かった。この日は、友達の綾乃と一緒になり、おしゃべりを楽しんだ。だけど私はあのお兄さんの事が、気になって頭から離れず、綾乃との会話も上の空になっていた。

春ヶ崎高校の何年生なんだろう？
どこのバス停から乗ってくるのだろう？
毎朝あの時間のバスなのか？
教科書を見ていたけれど、テスト？それとも受験生なのか？
いろいろ頭に浮かんでくる。また、あのお兄さんの仕草、情報が気になって仕方が無かった。

学校についても、ずっと考えていた。私はこんな経験をしたことが無く、気になって頭から離れてくれない。
これって何なのかな？
憧れ？まさか初恋・・・？？
違うよね。でも・・・。
偶然バスに乗り合わせただけのお兄さんにこんな気持ちになるなんて・・・。
授業中もずっとお兄さんの事を考えていた。

放課後

下校時間になり、綾乃とバス停に向かう。
朝の事は綾乃には話していない。他愛のない話をして、桜野のバス停で綾乃と別れた。綾乃は電車通学だ。

私は、桜野から自宅へ向かうバスに乗り換えることができるのに、朝の出来事が頭から離れない。お兄さんが降りたバス停に向かおうとしていた。お兄さんが降りたバス停までは、歩いてすぐだ。

私は何の為に行くの？行った先に何が待っているの？
自分に問いかけながら歩いていると、春ヶ崎まできていた。
しかし、お兄さんどころか春ヶ崎高校の生徒すらいなかった。
テストだったのかなと、思い、来たバスに乗り、自宅へと帰った。

明日も、絶対に同じ時間帯のバスに乗りたい！
あのお兄さんにあいたい・・・。
宿題を終えた後もずっと寝るまでお兄さんのことを考えていた。

バス停

次の日、いつもより早く目覚めた。
鏡にたつ時間がいつもより長くなっていた。
お兄さんの指先まで綺麗な手を思い出し、自分の手にハンドクリームをつけて、バス停へ走った。

私は願っていた。お兄さんが乗ってくることを。
もう一度あのお兄さん、あの人に会いたい。
祈りながら乗車した。

あのお兄さんはどこから乗ってくるのだろう？
私をバス停が見えやすい左側の窓のほうに自然と立っていた。

乗ってこない・・・やっぱり偶然だったのかなと思い始めていた。
今日はバスが込んでいる。このバスと同じコースのバスはたくさんあるから、他に乗ったのか？とも思っていた。
「次は、桜の森、お降りのかたはお降り下さい。」
お兄さんがいた。
乗ってきてと願ったけれど叶わなかった。
バスがこんでいたため、次のバスに乗ってしまった。
私には、お兄さんを見れただけでなぜか幸せになることができた。

お兄さんの乗るバスも分かり、少し嫌だったバス通学も楽しく思えた。
お兄さんにまた会えればいいなと思っていた。

その後も何度か同じバスになり、春ヶ崎高校の1年だということも分かった

チョコ

最近クラスでは受験の話が出る。
私も受験かぁ。春ヶ崎高校にいこうかなぁ。
しかし、春ヶ崎高校はレベルの高い進学校だ。
無理だなぁと思い諦めた。

名前も知らず何も知らない相手に、私は遠くから見ているだけ、ただそれだけで胸が熱くなる。
会えないとさびしい、会えるとうれしい。
私にはこの気持ちが何なのか分からない。
誰にもこのことは話していない。綾乃にも。
自分の心の中に入れておかないと、誰かに話してしまうと、壊れるそういう感じがした。

もうすぐバレンタインデーだ。
今まで私は友チョコしか渡したことが無かった。
あげたら迷惑じゃないか。
お兄さんは全く私のことを知らない。
知っていたとしても、同じバスの人ぐらいだ。
私に告白なんてできるのだろうか。
私は手紙を書いては破りを繰り返しやっとできた手紙をチョコと一緒にかばんに入れた。

当日

バレンタイン当日

２月１４日。
私はいつもよりはやく家を出て、何本か早いバスに乗った。
「次は桜の森、桜の森、お降りの方はお降りください。
お降りの方は、危険ですのでバス停に着いてからお席をお立ちください・・・」
バスの中で、アナウンスが流れる。
私は思いを込めたチョコと手紙を手にして、

「ピンポーン」
私は降車ボタンを押した。。。。

お兄さんにどうか私のこの思いが届きますように・・・
心の中で願う。

私はバスを降りた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8137r/

バレンタイン

2011年3月22日15時51分発行